

中国出張レポート：上海で見た「新しい中国」の姿②



世界最大のスターバックスへ

中国の消費大国へのシフトに期待が高まっている。スターバックスは2017年12月に、上海に同社にとって世界最大のカフェをオープンさせた。同店舗は高級化への取り組みの一環でもあり、有名なショッピング街である南京西路に出店された。驚くのはその店舗面積で、3万平方フィート（約2800平方メートル）とサッカーのピッチの約半分の広さだ。平日でも2時間待ちとの情報に、不安感を抱きつつ、どれだけ魅力ある店舗なのか、行列に並んだ。

上海スターバックス、外観

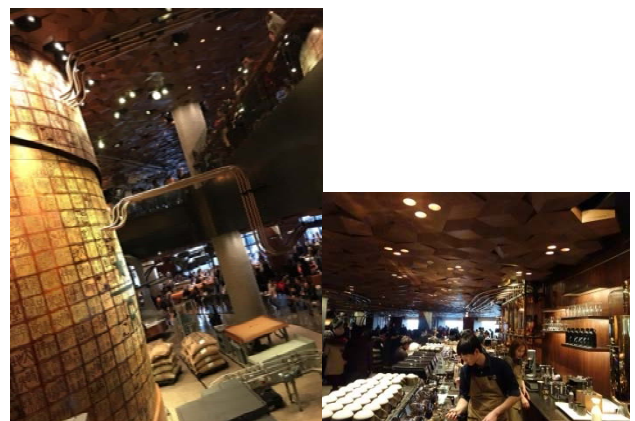


店内の巨大ロースタリーでは、銅製の巨大なキャスクでコーヒー豆が焙煎される。コーヒー以外にも窒素ガスを加えて抽出するお茶などの100種類以上のメニューの提供が可能だ。

新店舗で感じた消費と娯楽の融合

喫茶店というよりは「テーマパーク」だ。来客者の多くはコーヒー豆がローストされる場所を見学し、高品質コーヒーの試飲に夢中だ。店内をスマホで写真を撮りネットにシェアし、限定のグッズの購入にも熱心だ。すっかり上海での新しい観光名所だ。娯楽が少ないと言われてきた中国だが、このような体験型の「消費と娯楽の融合」は、がっちり中国人の心を掴んでいた。

店内の様子



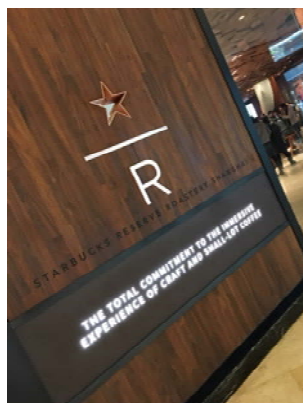
新店舗で感じた消費とITの融合

同店は電子マネー「アリペイ」と協力し、新たなサービスを提供している。お客はアリペイで支払いをした後、同店の近くをブラブラして知らせが来るのを待つことができるのだ。コーヒーができあがると、アプリが「お引き取りを」と通知してくれる。

新店舗の目玉は他にもある。拡張現実（AR）*を使ったサービスだ。スマホで専用アプリをインストールしてカメラを店内に向けると、コーヒーバーの詳細やコーヒーの淹れ方などが、AR で表示される。何もかもが最先端の新店舗。モバイル化が進む中国社会、そして IT 技術と消費の融合をここで体験できた。ちなみに、新形態の店舗は 2018 年 11 月、日本でも中目黒で初上陸を果たす予定。上海に次ぎ世界で 4 番目となる。

「スターバックス リザーブ・ロースター」

*AR とは、現実の環境から視覚や聴覚、触覚などの知覚に与えられる情報を、コンピューターによる処理で追加あるいは削減、変化させる技術の総称。



上海の街で見たセキュリティ強化

スタバからの帰路、気づいたことがあった。地下鉄の改札や銀行 ATM はもちろん、階段の昇降口や各交差点の信号、マクドナルドの入口、ガシャポンにも設置された監視カメラの多さだ。おそらくハイクビジョン*の監視カメラだろう。信号無視をすると、顔認証をし、違反者を特定、大型モニターで表示、など 13 億の人民への公安当局の厳しい管理が進んでいるようである。更に地下鉄には空港並みの荷物検査まである。

*監視カメラの世界シェア 1 位の中国企業

情報統制の影に見え隠れするもうひとつの思惑

中国では LINE が使えなくなったのが最も不便であった。グーグルやフェースブック、ツイッターが使えないと聞いていたが、LINE も 2014 年 7 月から規制されていた。中国のネット規制システムは『金盾』（キンジュン）と呼ばれている。この金盾によるアクセス規制は、中国の微博（ウェイボー）や微信（ウィーチャット）の独占状態を作り、彼らの大躍進の要因になっている。この展開は、中国政府と中国企業にとっては作戦通りなのだろう。



上海市内の交差点



上海地下鉄

※次回は、上海の家電量販店と老舗百貨店での発見など、新しい中国での消費の変化に迫ります。

商号： UBS アセット・マネジメント株式会社 金融商品取引業者 関東財務局長（金商）第 412 号

加入協会： 一般社団法人投資信託協会、一般社団法人日本投資顧問業協会

本資料は、情報提供を目的としたものであり、特定の金融商品取引の勧誘を目的としたものではありません。本資料は、信頼できる情報をもとに UBS アセット・マネジメント株式会社によって作成されておりますが、その正確性・完全性が保証されているものではありません。本資料に記載されている内容・数値・図表・意見・予測等は、本資料作成時点のものであり、将来の市場動向、運用成果等を示唆・保証するものではなく、また今後予告なく変更されることがあります。

© UBS 2018. キーシンボル及び UBS の各標章は、UBS の登録又は未登録商標です。UBS は全ての権利を留保します。